

「道徳の教科化をめぐる」②

一般社団法人在家仏教協会

理事 菅原 伸郎

(すがわら のぶお)



二〇一八年度から公立学校の道徳教育が「教科」に格上げされる。前号では、通知表に評価が記されることなどを宗教の視点もまじえて紹介した。今回は「愛国心」や「畏敬の念」を考える。

低学年から「我が国」

新しい学習指導要領では、小学一、二年生にも「我が国や郷土の文化と生活に親しみ、愛着をもつこと」(傍線は筆者)を教えるようになる。これまでは「郷土の文化や生活に……」となっており、三、四年から「我が国や郷土の……」となっていた。まずは身近な郷土愛

を育んでから「我が国」を教えたのだが、今後は低学年から愛国心を教えるわけだ。

文部科学省は幼いときから国家への帰属心や忠誠心を植え付けたいらしい。しかし、いまは国際結婚や海外移住や二重国籍が珍しくない時代だ。国籍とても絶対ではなく、たまたまの出生による相対的な価値である。もっと大らかでいい気がする。ヤクルト球団のファンたる私は、オランダ領アンテル諸島出身のバレンティン外野手が巨人の日本人投手を打ちのめすことを日々願っている。

もちろん、衛星テレビで大リーグ・ヤンkeesのマー君の活躍を

観て喜んでみいる。彼が日本で活躍していたときから応援していたからだ。見ず知らずの選手なら、日本人であってもさほど関心を持たないだろう。つまり、こうした日本びいきも身近な郷土愛の延長上の話なのだ。

心の奥底まで愛国心に染まりたくないのは、たとえば「カジノ解禁で金もうけを目論む国など、愛せるか」などと批判する権利を留保しておきたいからでもある。良い話が続けば親日に、怪しい話が続けば嫌日に——これが自然な感情のように思う。

愛国心は人類愛に通じるか

一九六六年に中央教育審議会が文部大臣に答申した「期待される人間像」を読み直してみた。道徳教育の今日までを方向付けた基本文書である。

《個人の幸福も安全も国家によるところがきわめて大きい。世界人類の発展に寄与する道も国家を通じて開かれているのが普通である。国家を正しく愛することが国家に対する忠誠である。正しい愛

国心は人類愛に通ずる。》

結構じゃないか、と思う方もおられよう。しかし、この答申が出された時代の背景を振り返ってみたい。同じ六六年には旧紀元節が「建国記念の日」として復活している。続いて靖国神社法案が国会に何度も提出され、君が代の不斉唱などで学校教員の処分も各地で繰り返されていく。紀元節で歌われた「雲に聳ゆる高千穂の……」といった、古色蒼然たる復古主義が背後に見え隠れする。

実は、私には「正しい愛国心は人類愛に通じる」という論理が分からない。本当にそうだろうか。たとえば、イエスは当時のローマ・ユダヤ国家に逆らって十字架の上で隣人愛を説いたはずだ。釈尊にしても、王子として生まれ育った釈迦国を捨てて人類普遍の道を求めた方である。

本来、仏教では「愛」は賞められた言葉ではない。愛執、偏愛、愛着、愛欲、喝愛といった言葉が示すように、執着や煩惱、そして固定観念や排他主義に結びつくからだ。頑固で偏狭な「愛」を乗り

越え、大きな慈悲に至ることこそが釈尊の教えだった。

からいころ

排外主義の懸念

近年の国際情勢、とくに近隣某国の膨張主義を憂えるとき、自衛力を全否定することは難しくなってきた。そうではあるのだが、気になるのはこうした「外圧」を理由に愛国心をことさらに叫び、さらには日本が特別な国であるかのように言い立てる流れである。威勢のいい独善主義がまたぞろ顔を出してきた。

こうした思潮は、近世では江戸後期の本居宣長まで遡る。「古事記」を研究した宣長は、日本を神国と見立て、キリスト教はもろろん、仏教も儒教も「からいころ」として排撃した。その思想は平田篤胤や長州の志士たちに受け継がれ、明治の薩長政権による「廃仏毀釈」へと繋がった。

外来の宗教や思想を排除して何を優先させたのか。教育史をひもとくと、一八九〇年には「教育勅語」が公布された。九年後の文部

省訓令十二号は、公私立学校での宗教教育を禁止し、仏教もキリスト教も学校現場から締め出す。その一方で「神道は宗教にあらず」とし、戦時中は子どもたちに神社参拝を強制した。そして、こうした排外主義は今日も「ヘイトスピーチ」などに生き続けている。

畏敬の念への疑問

道徳が正式の教科に格上げされることで、先生たちは「宗教的情操」にもいつそう真剣に取り組みねばならなくなる。現行の学習指導要領では《人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める》となっている分野だ。

この「畏敬の念」という概念はもともと、アルベルト・シュヴァイツァー博士が諸宗教に通用する価値観として提唱した。日本の教育界でも昭和初期から注目されてきたが、宗教に関心の薄い教師たちにはいかにも難題だったろう。夏の夜空に輝く満天の星を見上げさせてお茶を濁す、といった指導も多かったようだ。

しかし、そもそも、この「畏敬

の念」は宗教的情操の本質なのだろうか。詳しくは拙著『宗教の教科書 十二週』（トランスビュー）の付章をお読みいただきたいが、少なくとも仏教の根本とは違っており、私は考えている。

たとえば、東京・浅草の浅草寺を訪ねると、本堂正面に「施無畏」と書かれた額がかかっている（写真）。畏れ無きを施す、怖がらなくてもいい、という意味だ。畏れの対象になるようなモノは存在せず、一切は無という正しい覚りこそが大切、と教えている。

なるほど、原始・太古にあっては雷鳴も地震も伝染病も夢も、不思議で畏れ多き存在だった。ユダヤ教もヒンドゥー教も、人間の力を超えたモノを日々畏れてきた。

神社の社殿では「畏み、畏み、申す」と祝詞をあげている。

一方、たとえば、孔子は「怪力乱神を語らず」と教えた。イエスは畏れよりも愛を語った。だれよりも二千年ほど前、釈尊はそうした「迷い」からの解脱を説かれている。そんな疑問も多い「畏敬の念」を学校で教え続ける狙いは結局のところ、やはりあの神なからの道なのではないか……とも思えてくるのである。

*

最終回の次号では、道徳教育と仏教者の役割について考える。

プロフィール

菅原伸郎（すがわら・のぶお）

一九四一年生まれ。早稲田大学政治学科卒。朝日新聞社で論説委員、大阪本社学芸部長、東京本社「こころ」編集長などを務め、二〇〇三年に退社。東京医療保健大学教授を経て、現在は立正大学講師として「宗教教育論」を担当。著書に「宗教をどう教えるか」「宗教の教科書 十二週」、編著に「戦争と追悼——靖国問題への提言」。



(写真提供：菅原伸郎)